季節を詠む、時流を詠む 四季の歌

美野里短歌クラブ

コロナ禍の渦巻くさなか涸沼まで買いに行きたり土用の蜆　菱沼清子
炭酸がプチプチと鳴る青い空夏に会いたい梅雨明けはいつ　菱沼友江
囲碁に行く夫にむかいて孫達は「じー、遅れるよ」とせきたてており　宇都宮和子
なにもかもコロナ我慢は気がめいる蝶と遊びつつ庭の草引く　碇谷きえ
桜木の病葉風にひらひらと何所まで飛ぶか暫く見つむ　白根沢清香

小川短歌会

いくつもの小さな坂道登りゆく今朝の散歩は少し汗して　根本智恵子
昭和ひとけた生を受けきて九十年越えし荒波おだしき余生　石田はる江
夕餉には友より秘伝の調理してゴーヤ食せりうましうましと　中根良子
規格されて並ぶ窓の灯さまざまの倖醸しつつ闇にふくらむ　幡谷啓子

玉里短歌会

柔らかさ失い散りし桜葉に傘寿迎える己を見たり　齋藤かつみ
花のない部屋に一輪ねこじゃらし揺れて嬉しい朝が始まる　高田久子
「牡丹餅のおいしい店を知っている」老いの二人の会話は弾む　正木敦子
「SAIGON」のスタンプにじむパスポート初めて手にせし若き日返る　松田通喜
萩の花小さく白く枝の先風に揺られて秋運びくる　高見沢こう

寄稿

夏過ぎし秋来にけらし別珍のスーツでディナー金婚祝　上野和子
戸を開ける金もくせいの香りよし　深作茂登子

みづうみ俳句会

パンを焼き晴耕雨読天高し　長島美奈子
秋高し生きるものみな空仰ぐ　榎本喜代子
朝に夕鳥の来ている熟し柿　茅場久子
新米と告げて朝餉の仏様　長島久美子
天高し紫峰筑波の雄大さ　長島昭

みのり俳句会

ぬか漬の色良し味良し茄子漬かる　立原千代
ぬばたまの今宵も楽し虫の声　塚田文江
残暑とは名ばかりなりし暑さかな　友水清
立ち話し暑さをさけて長びきぬ　井坂あさ女
空青くみんみん蝉が朝早く　坂光子

欅の会

しがらみを捨てて尾花の風の中　網代奈津江
ふたり居て十五夜の月愛でるとは　岡島禮子
芒原風の一刷毛パステル画　村田妙子
十五夜は身に棲む鬼を足下に　石井敏江
ふるさとへ軍靴遠のく芒原　木村小夜子

くるみ俳句会

虫の音に心いやさる湯舟かな　杉山照子
秋風の吹き抜くのみの滑走路　福島邦誉
飛行機の飛び行く先の鰯雲　堀内いづみ
もや立ちて茨城空港秋深む　松﨑淑子
発着便なくて静もる秋空港　安彦昭子

玉里俳句会

機械化やあっと言う間に芋を掘る　斉藤富子
廃線の鉄路の錆や花すすき　野口初江
消毒し柿の熟すを待ちにけり　長谷川光男
放牧のドンデン山の花野原　矢口友子
霞浦(かほ)の水照らす夕日や鳥渡る　鶴町文男

小美玉川柳会

地球にもブラックホールそこかしこ　阿久津強
日々是好日お茶を楽しみ四季を観る　小林岳悠
年輪をかんじさせずに背で演技　石井昭夫
飼い主とオウム仲良く茨城弁　橋本昇久
田の神の居場所失うおらが里　江戸忠雄